

日弁における

聖心会八十年のあゆみ

一九〇八年—一九八八年

三好切子

不二聖心女子学院の設立

中共革命のために聖心会修道女がやむなく上海から日本に引き揚げることになった当時の日本社会は、まだ敗戦直後の混乱の中で揺れ動き、新しい立場での自国のアイデンティティを模索して焦っている最中だった。伝統的な考え方に代わって、民主主義が半ばお仕着せの形で推進されていた。

教育の分野でも同じことが起こっていた。形式的には民主的な機構に改編されたといふものの、日本文化を背後に持つ者にとっては全く的外れと思えるものも少なくなかった。

聖心女子学院では、戦時中に比べてはるかに自由が尊重されるようになった時代に、いかにして聖マゲダレナ・ソフィアのカリズマ、聖心会の建学の精神を、日本文化の真髄を失うことなくかつ新しい時代に賢明に生かして行くべき

か、真剣に検討を重ねていた。

こんな時代の流れの中で、不二聖心女子学院創立の道が、密かに開拓されつつあった。

現在、不二聖心女子学院の敷地となっている旧不二農園は、明治初年に幕府の旗本が静岡県に帰農して開拓した森林六〇町歩、茶畑約一〇町歩で、それを実業家鈴木藤三郎氏が譲り受けて茶園として経営していた。その後抵当流れとなり北浜銀行に所有権が移っていた。

後に不二農園の所有者となる岩下清周氏は、実業家として関西・関東各地に多くの事業を興して社会のために尽くしてきたが、彼が頭取をしていた北浜銀行の倒産は、社会に多大の混乱をもたらす結果となった。彼は責任者として私有財産をその弁済に当て、大正三年には一閑農として富士山麓に引退することに決めた。

そこで氏を思う親しい友人やかつて氏の恩を受けた人々が尽力して、大正四年には不二農園

は岩下清周氏の所有するところとなった。

清周氏はこの後、農業に埋没した。自ら鋤を取る腕力はなかったが、働いて働いて他を抜く、という岩下流の農民になり切った。そして従業員を激励し感化して、ついにこの農園を精勤な一村落、杉・檜・松の美林、銘茶を産する茶園、さらに果樹の育成や温室栽培をする農事試験場的存在として、この地方の模範的な農場に育て上げた。

清周氏は教育の大切さもよく理解していたので、大正九年には農場の従業員の子女や近隣の農家の子弟の育成のために、農園内に財団法人私立温情舎という小学校を創設した。清周氏の古武士的な精神と、令息の岩下壮一神父がもたらしたカトリック精神が融合して、この学校の建学の精神が形成された。

清周氏はまた裾野在住中に、神山こうやまにあるハンセン氏病患者のための復生病院を訪れて、院長として、ハンセン氏病にさいなまれている人々

への奉仕の日々を送っている外人宣教師ドルワール・ド・レゼー老師の生きざまに感激した。

そして日本がまだ精神的にその域に達していないうことを遺憾に思つて、神父・壮一師に、神に仕える者としてあのような奉仕の生活を送る気はないのかと尋ねた。壮一師が機会さえあればそういう活動に専心したいと望んでいることを知つて、清周氏は大いに満足した、と彼の伝記に書かれている。(岩下清周伝 p.48)

昭和三年三月十九日の夜半、清周氏は心臓麻痺で急逝した。葬儀は岩下壮一師によつて、温情舎の講堂で、多数の友人に囲まれてしめやかにそして荘厳に取り行われた。

葬儀のミサの中で、壮一師は父君が社会にもたらした混乱について人々に心から謝罪し、個人的にかけた迷惑や苦しみに対しては、自分が生涯を人々への奉仕に捧げることで償いを果たしたいと真心をこめて詫びた。

清周氏の遺骸は、家族・友人・農園の人々に

送られて、農園の一隅に用意された墓地に埋葬された。

その後、壮一師は縁あって昭和五年十一月より、父の遺志を継ぎ、またその供養もかねてだろうが、復生病院の六代目院長になった。そして昭和十五年までの十年間、これらの病人への奉仕に献身した。

不二農園の管理その他は、その後母堂の幽香子氏に委ねられた。その幽香子氏の帰天後、相続者間の協議の結果、昭和二十年十月、不二農園の不動産一切は、壮一師の妹であるマザー岩下亀代を通して、聖心会に寄贈されることになった。翌年十月には、私立温情舎の経営も財団法人・聖心女子学院に委譲され、三光町聖心女子学院の校長マザー吉川が、ここの校長を兼任することになった。

昭和二十六年の組織変更によって財団法人が学校法人となつてからは、法的には法人の収益

事業として、農園主事の杉山幸一氏が不二農園の管理に当たつた。そして昭和二十九年に杉山氏が急逝した後は、マザー畑中が直接管理に当たり、対外的には渡辺啓氏が代行した。

昭和三十三年四月には井上茂樹氏が新しい主事に就任した。

現在、裾野の農園は「学校法人・聖心女子学院」に所属している。

聖心会不二修道院の新設

不二農園の一带は、北に富士山を仰ぎ、南には箱根連山をひかえて、風光明眉、空気も清く澄んだ丘陵地にある。一九五二年、その一隅にある旧岩下邸の日本家屋をわずかに改造して、修道院が誕生した。

上海から引き揚げてきたマザーエリザベス・

ダフを院長に、マザーアリス・アトキンソンが副院長、マザーグラディス・ゲテレスが会計、シスターはカミレリとロレッタ、日本人はマザー・渡辺梅子、吉村新子、シスター山口チヨらが初代のメンバーであった。

マザー吉村が学校の主任として生徒の指導に当たり、他の修道女たちも皆、学校で何らかの使徒職にあずかることになった。

四月二十一日から授業が始まった。

聖心温情舎高等学校

—不二聖心女子学院高等学校—

私立温情舎小学校は、昭和二十二年の学制改革に伴って、新制の温情舎女子中学校を設置した。昭和二十五年には中学校卒業生を受け入れるために、温情舎家政学校が併設された。間もなく父兄からの要望もあって、校名並び

に学則変更の手續きを取り、二十七年四月には聖心温情舎高等科（各種学校）と改めることが認可された。

次にこれを高等学校に昇格させることになった。準備万端整い、昭和二十七年十一月二日付けで、聖心温情舎高等学校普通科の設置を申請し、翌年四月一日認可された。

この認可を受けるに当たっては、地元の多くの有力者の方々から得た協力を忘れることはできない。県会議員・岩崎亀氏、静岡東洋英和学園長・室田有氏、その他、焼津高等学校長・松永勇氏、西遠女子学園長・岡本富郎氏、沼津精華学園長・秋鹿重彦氏らから特別の援助を受けた。静岡雙葉学園の狩野良夫先生は、県庁の近くにある関係上、常に学院に代わって当局との交渉の労をとってくださった。

こうして各種学校の高等科生は、すんなりと普通科の高等学校生になることができた。小・中・高合わせて、全校生徒数は八十二名であっ

た。

不二聖心女子学院は十年計画で校舎の完成を目指すことになった。昭和三十一年三月一日に、丘の上の茶園内の新校舎予定地で行われた定礎式を以て第一期工事は始まった。木造二階建モルタル塗りの校舎九百六十一坪は、渡辺啓氏の設計施工で、昭和三十二年三月に完成し、中学、高等学校と修道院はこの建物に移転した。

四月からは名称が不二聖心女子学院と改められた。四月二十三日、荒井横浜司教のミサにより、新修道院と新校舎の落成式が正式に挙行された。

三十三年には茶園経由の自動車道路が完成し、修練院、聖堂、校舎、体育館などの第二、第三期の工事が着々と準備された。

学校主任マザー竹井恒子が東京に転勤になった後をマザー森村信子が継ぎ、学校の発展を促進してきたが、三十三年にはそのマザー森村が

小林聖心女子学院に移ることになり、ローマから帰ったマザー竹井がふたたび不二聖心女子学院のために尽くすことになった。

三十四年七月には聖堂の建設も完成した。夏期休暇中は寄宿舎の設備に相当な余裕が出るので、学院生のためのサマースクールが開かれるようになった。昭和三十年頃からは三光町の聖心女子学院の生徒や、他の学校の生徒のためにも使用されるようになった。

聖心会修練院の移転

昭和三十二年五月二十三日、歌隊修練女の日から、十二名の修練女と二名の志願者は三日に分かれて裾野へ向かい、二十二日には全員が揃った。そして二十五日に管区長マザーキオによる奉献をもって、正式に修練院として発足し

た。修練長はマザーエレン・マーであった。

助修女の修練院はマザーテイボアの指導のも

とに、以前通り小林で続けられた。

マザーシエルドンの帰天

戦後、多くのミツシヨナリーが帰天した。マザースーラム、ウォーディ、カレン、ヘンダーソン、ブシユテル、ド・ボルガー、それにシスタースタックラである。また自国に戻って天に召された者もあった。マザースーフレンチ、ゴールター、シスターソボタなどである。

この時期に東洋管区は一転換期を迎えていた、と言っているだろう。聖心会の記録では、一九五五年にはミツシヨナリーが七十二名、東洋人七十六名、と記されている。ついに東洋人の会員が、ミツシヨナリーの数を越えたのである。東洋人の多くはまだ若い未経験者だったが、

やがては彼女たちが責任ある使徒職に従事することになる。

一九五二年（昭和二十七年）の秋にローマ総本部で開かれた総会が、おそらく自分にとって最後の総会になるであろうとマザーシエルドンは思っていた。

この総会への出席者はかなり多かった。この頃に二分された管区がいくつかあったからである。

オーストラリアの新管区長マザードロシー・マクギネスも、新設されたニュージランドの管区長マザーエヴァンジェリスタ・コエンも参加していた。

開会の挨拶の中で、総長マザード・レスキユは次のように言った。

「……聖心会の精神に対する新たな認識とその実行への誠実な努力、それは同時に各々の時代へのイエズスの聖心の関心に心を開くことであ